

Down Memory Lane ~prologue

——2009年12月

「うそーっ!?こんな脆いの？」

かなり丈夫に出来ているはずのストップウォッチだ。めぐ先生はうっかりそれを落としてしまっただけだし、衝撃音すらしなかった。

それでももう、いくらボタンを押しても動かなかった。

「せんせーい！」

呼ばれて振り返ると、半年ほど前に陸上部を引退した3年生の女子生徒6人が立っていた。

「あんたたち、この前も来たばっかりでしょ！もう年明けたらすぐ受験なんだから！」めぐ先生が注意した。

「この前って、前来たの1ヶ月以上前だよ。」生徒が指摘する。

「あれ、もうそんな経ったっけ？やっぱり授業やってないと曜日感覚狂うなあ。」

「今日はるちゃん来てるんですね！」6人の生徒はベビーカーに群がった。

「はるちゃんかわいいなあ」

「見て！笑った！」

「こんな赤ちゃんなのにこれから成長して歩いたり喋ったりするとかさ～、なんかすごくなーい？」女子生徒たちは口々に言う。

「ねー！すごいよね。」そのうち1人が雑談をめぐ先生の方向に切り替えた。「はるちゃんの成長、楽しみですね。」

「うん、そうだね。でも…」

*

*

*

年が明けて半月ほどが過ぎた。

明日はセンター試験だから6人はお昼前に学校も終わっていたのだが、一旦ファミレスに行ってお昼ご飯を食べたりしてからまた学校に戻ろうとしていた。

ほぼ全員が、制服のスカートをかなり短くして履いていて、コートも着ていない。マフラーだけは大きくて暖かそうなものをしていても、はたから見れば1月の中旬にもかかわらずすごく寒そうな格好だと言える。

彼女たちが特別そうしているわけではなく、周りの女子高生たちも、大体同じ制服の着こなしをしていた。

部活帰りはこの道をいつも6人で歩いていたけど、でも引退してからもなんだかんだそうやって帰ることは多い。

だから、会話も特別なものじゃなく、ごくいつも通りだった。

「卒業旅行行こうって話したじゃん？どこ行こつか！」と、“ザ・卒業間近の女子高生”みたいな会話を始めた茜は、身長、偏差値、、どこをとっても普通すぎる超平均女だ。

「え～、迷うなあ。どこがいいかな～。」優柔不断な彩が言うことは答えらしい答えではなかった。髪の毛もふわふわならば、雰囲気もふわふわなのだ。

「もう！大事な試験前にそんなに浮かれて！」麻衣は、優等生らしく規範的なことを言った。流行ではなく季節に則った「冬の格好」をしている。

「そりや試験もあるけど～、でも遊ぶのも大事じゃん？JKなんだし！」里奈は華やかで目立つタイプだ。言うこともキラキラ輝いている。

「せっかく明日のこと忘れようとしてたのに、思い出せんなんよ～。」美穂は飄々として、本気とも冗談ともわからないことを言った。

千尋は、何も言わないし笑ってるようにさえ見えなかつたけど、この状況が面白くて仕方ないみたいで、本当に顔に出ないタイプだ。

「麻衣もそう言うわりに、今日は大事な試験前なのに帰らないんだ？」と美穂がからかう。
「それもそうだけど…」麻衣は一旦迷つてから、表情を引き締めた。「でも、やるべきことやってるからこそ、それを後押ししてもらうの！」

6人は、明日のセンター試験を前に、めぐ先生に激励してもらひたかった。ただし、1人を除いては。

「あの…さ」彩が申し訳無さそうに切り出した。「やっぱりセンター受けない私まで行くの変じゃない？」彩は小柄でとっても可愛らしいが、声も小さくてやっぱり可愛らしい。
「いーの！こーいうのは6人じゃなきゃ！」話し方がそう聞こえなくつたって、言ってる内容は優しいのが里奈だった。

今日は金曜だから、グラウンドに着けば1、2年生の後輩たちが練習している日だった。でも顧問のめぐ先生の姿はなかった。
後輩たちは、6人に気がつくとみんな挨拶をして、その中の1人に聞けば、めぐ先生は昨日も子供が風邪をひいて来なかつたらしい。

麻衣がメガネの位置を正しながら「職員室で聞いてくるよ」とせっかく言い出そうとしたのに、6人のじゅんけんは突如始まった。手にミトンをした彩だけがチョキを出せなかつたわけではないけれど、それでも他の全員がパーを出したので“誰が職員室まで走るか”が決まつた…ように見えた。「彩はマネージャーなんだし」言ったのは茜だったが、みんなそう思つていた。右手でパーを出した茜のもう片方の手がギュッと折りたたみの携帯を持っているのを、里奈が指さして「茜もグージャン！」とか言い始めて、決まつたはずのじゅんけんがめちゃくちゃになるのだった。でも、高校生って、そんなもんでもよかつた。

結局なぜか茜と里奈が再じゅんけんしていた。モデルさながらの容姿の千尋は相変わらず何も言わずにじっとそれを見つめるだけで、まるでマネキンのようだった。でも、心の中では盛り上がつているようだった。

後輩の一人がじゅんけんに気付いて「私もさつき職員室に行って聞いてきた」と報告しようとするのを、美穂がそのギョロッとした目を向けながら「ぜってーそれ言うなよ」とニヤニヤしながら阻止する。麻衣はじゅんけんの頃からもうずっと呆れていた。

高校生の間、ずっとそうやって過ごしてきた。

結局、校舎にむかって走り始めたのは茜だった。
1月の空気は冷たく、走るとそれが顔に突き刺さるようだった。
私たちはすべての季節を走ってきた。
部活を引退してからはそんなに走ることなんてなくなってしまったのを実感して、茜は、この高校生活で走るのがずいぶんと楽しくなったのだと思い返していた。

「今日は午前中で終わったのに、なんでまだ学校にいるんだ！明日がセンター試験だって忘れたのか！？」職員室まで走ると、まずはクラスの担任にこっぴどく叱られた。
「そ…それはわかってるんだけど、めぐ先生は？」
「さっき電話かけたけど繋がらなかつたんだよね」と他の先生が教えてくれた。

「おかえりー。めぐ先生連絡取れないって言ってたでしょ？」また走って校庭に戻ると、状況を後輩からすでに聞いていた他の5人が待ち受けた。
「ちょっとー！」茜自身すら面白くなってしまって、笑いを堪えながら言った。「私担任に『まだ帰つてなかつたのか』って、めっちゃ怒られたんだけど！全然意味なかつたじゃん！」
6人でいる時間は、意味のないことまで面白くさせてしまう。

「どうしようか？このまま待ってても今日は難しいかもしれないよね。」麻衣がなるべく暗くならないような口調を意識して言った。
「じゃあさ、帰る前に、明日に向けて一本やろ！」と茜が提案した。

6人が円陣を組んだ。「桜川ーっ！」「走るぞ！」などと里奈が掛け声をする度みんなで「おーっ！」と返していく。
円陣がとけると、トラックのほうへとポツポツ歩き出す。「“一本やる”って、もしかして走るの!?」と、もう終わつたつもりだった麻衣が驚いて注意を促した。「みんなー！明日は試験なんだし、軽く走るだけね！」
「みんなー！1位でゴールしたら第一志望合格ね！」里奈が全然似てないモノマネをして、麻衣本人に怒られていた。

彩は自分がみんなを見守る役目とばかり思っていたから、トラックに向かうみんなを当たり前のように眺めていたのだが、「あれ彩は？」と聞かれて初めて「私マネージャーだし」「明日もセンター受けないし…」と色々なカードを並べるようにして言った。美穂が悪い顔しながら「バカやるときの抜け駆けは許さん！」とカードを蹴散らし、そこを千尋が涼しい顔しながら「行くよバカども。」と美穂もろとも連れて行ってしまったのだった。
千尋、きっと心底楽しかったに違いない。

それから、それぞれに受験を終え、あっという間に卒業の日は来た。
めぐ先生はこの2ヶ月弱ずっと休んでいるらしく、陸上部は違う先生が顧問を担当していた。受験の激励どころか、新たな進路への激励さえもらえず仕舞いになった。

だから、陸上部の部室内、どこにするかは迷ったけど、結局壁にこう残して、隠すようにロッカーを置いた。

めぐ先生
これ見たら絶対連絡ちょーだい！！！
あかねまいみほ
りなあやちひろ
2010.3.6

もう誰も、めぐ先生に会うことすら叶わないとも知らずに。

「見てこれ、ロッカーとかすと壁に落書きしてあってね…」
「ほんとだ。2010…？15年くらい前？」

Lane1 山田茜

Lane1 山田茜

「優愛～、おいしいおいしいだねえ～」1歳児はそう言われたって、うまく食べられるわけでもない。ボトボトと食事が床に溜まっていくし、それどころか持たされたスプーンを投げ、さらに無法地帯をひろげていく。

「湊、落ち着いておもちゃと遊ぼうねえ～」3歳児はそう言われたって、黙ってぬいぐるみを撫でていられるわけでもない。ミニカーは床にひろがった食事に進入し、危険地帯をドタバタと素足が荒らしていく。

結局この朝も茜が2人の可愛い子供たちをなだめられるわけもなく、怒鳴り声が虚しくも響き渡るだけだった。

茜はどこにでもいる超平均女。身長157センチ、普通の学校を出て、今は一般企業で事務をしている。だから、茜自身もこんな毎日は日本全国どこの女性もそんなもんだろうと思い込んでいた。

自転車の前と後ろに子供たちを乗せた頃にはもう茜は疲れ切ってしまっている。

それでも一、子を保育園に置いても、自転車を駅に置いても、自分だけはずっと走るしかなかつた。

「おはよ、早いね。」茜の席のある通路を声が通り抜けた。

「ユカコ。おはよう。」茜は目も意識もパソコンに貼り付けたまま声だけで返した。「昨日資料やるつもりだったのに寝かしつけで寝落ちした。」

「あー11時の会議のね」ユカコは茜の同期で、1児のママである。「だからネントレ勧めたのに。」ネントレ…なんだったっけと茜は途中で思い出すのをやめて、自分の対応が悪かったかとなるとなく罪悪感のようなものを自分の中に溜めておいた。

柱にかかった時計はもうすぐ11時になる。

「山田ア！これ！」部長の声が飛ぶ。「なーんて直前に送ってくんの？もう会議のとき渡してくれればいいよ。」

「はあ。」茜はどの返事を選んでも部長のお言葉が変わらないことを重々承知でどうでもいい返事をした。「おめーが直前でも送れつたろーが」というのはさすがに心の内にしたが。

「いつから頼んでると思ってんの？」と予想通りに返ってきたのがちょっと面白くなってしまい、その先も「時短勤務にさせてあげてるんだからさ」と続く未来を読んで、ちょっとの言い回しの違いをなるほどと思ってから、その先も何か色々言うであろうことは適当に相槌をして、耳を貸さなかつた。

「佐藤さーん。」他の声が茜を呼ぶと、そこはきちんと返事をするのだった。「外線2番に保育園だって。」

保育園のワードだけで、茜はまたこの先の未来を読んでしまった。きっと湊が熱を出したのだろう。それと、会社への電話だけではなくたぶん自分のスマホにも着信が入っているはずだが、昨日の寝かしつけのときに着信の振動すらオフにしてしまって、そのままだったんだろう。あとは、夫にお迎えを代わりに頼めないか電話してもきっと無視される。

結局読みは少し外れていて、湊ではなく優愛が38度超えの熱とのことだった。もちろん、夫が電話に出ないところは合っていた。

ちなみに、茜はこの会社に結婚前から勤めていて、部長からは旧姓の山田のままで呼ばれていた。それで、山田と呼ばれたり、今の名字の佐藤で呼ばれたり、ユカコからは茜と呼ばれるし、家ではママと呼ばれて、それでも全部に反応できるようになっている。

駅で帰りの電車を待っていると、2人組の女子高生が降りてきた。サク高の制服だとすぐわかつたが、いくら母校の制服でも、もう自分が着ていたものとは違うものに見えた。

だから、茜には懐かしいなんて微塵も無く「高校生がこんな時間に駅にいるなんて、1学期の中間試験にはまだ少し早いけど何だろうな」と思うだけだった。だって、もう彼女たちから見たって「先輩」でもなく、ただの「おばさん」か、頑張っても「お姉さん」だ。

昼時の電車はラッシュまでいかずとも少し混んでいる。

スマホで保育園の連絡帳アプリを見ていると、メッセージアプリの通知がそこに割って入った。高校陸上部の同期女子グループ「りくじょ」にスタンプが送られてきていた。

「久しぶり」のスタンプに「久しぶり」と返すだけで、最寄りの駅に着いたので自転車を捨ててまた走り出す。

どうせ湊だけ保育園に残したって夕方には迎えに来なければならないので、2人いっぺんに連れて帰宅した。

帰宅して2人とも熱を測ってみると、湊は平熱のままで、優愛も平熱まで下がっていた。

急いで出社してまで資料を用意した会議を不参加にして職場をあとにした茜は、がっくりとしてしまった。本当は、「子供が熱もなく元気ならばほっとしなければならない」とまた罪悪感のようなものを自分に溜めていった。

「ママあーそーぼ！」と湊が笑うので、自分に溜め続けた重いものに少しだけ風が通った気がした。

「病院に行けば他の風邪をもらってくるかもしれない」と自分に言い聞かせ、様子を見ながら夜を待った。

食卓に並べた3歳児向けのごはんは半分程度がきれいなままで残され、1歳児向けのごはんは半分程度が床に移動しただけだった。茜自身ともうすぐ帰って来るであろう夫の夕飯もついでに用意していたのだけど、先程までモクモクと立っていた湯気も茜を置き去りにどこかへ行ってしまったようで、やがて見えなくなっていました。

「パパー！」玄関の開く音に最初に気付くのはいつも湊だ。

「優愛ただいまあ～、風邪かな？大丈夫か？」優愛はバタバタと反応し、牛乳の入ったコップを倒してしまった。茜は急いで雑巾を持ってくると床が白く染められていくのをとどめた。

「茜ごめんなー、電話くれたの気付かなくてさ。」そそくさと足元を拭いてまわる妻をぼーっと眺めながら「気付けばお迎え行ってたんだけどな～。」と、それにしてもぼーとしたことを言う夫であった。

「はあ。」茜は家に帰ってからも返事を選ぶのに考えを割かなかった。

「明日ちょっと朝早くてさ！…あれ、メシ冷めてんの？そしたら先風呂行くよ。」

バタンという音にリビングと廊下が切り離され、茜はおもちゃの散乱するその空間にまた閉じ込められたままになった。

子を寝かせようとする親というのは、そのまま気絶するように夜を過ごしてしまうものだ。

この日1人寝室から脱出に成功した茜は、数日前から存在感を増し続けていた洗濯物の山をやっと切り崩していた。

車のワッペンがついた小さなリュックに小さなシャツとズボンを詰め終わると、その隣に置いた大きなくたびれたバッグからパソコンを取り出した。メールを一通り見終わってそのうちの1件に「明日の朝イチで対応させていただきます」とだけ返しておいた。バッグへと戻そうとすると底のほうで何かに引っかかった。

電車で見て以来忘れ去っていたスマホだった。

「そういえば、彩から連絡きてたな。」グループのメッセージ以外にも通知は入っていたが、明日の天気を知らせるものや今日のニュースをまとめたものくらいだった。
メッセージアプリには自分が昼間送ったスタンプの後に10件以上メッセージが続いているようだった。「久しぶりに集まろうとかかな。」

「めぐ先生のことなんだけど、、」

茜は10数年ぶりの恩師の話題に喜ぶ間もなく、その後のメッセージが少し視界に見えてしまい、驚いて画面を消してしまった。バッグの近くにスマホを伏せて気持ちが落ち着くのを待っていた。それからどれくらい経つだろう、「ゴホッゴホッ」と咳き込むのが聞こえ、茜は我に返った。寝室の暗闇に入ったかと思えばすぐ廊下に現れ、次は体温計を持ってまた寝室へと戻り、そしてまたしばらくすると姿を現し、今度はパソコンを持ち出そうとバッグに手を入れた。近くにあるスマホには、意識的なのか無意識なのか、一切目をやらなかった。

翌日対応しようと思っていたことをやり始めると、再び寝室に行く頃にはまさしく翌日の日付に変わっていました。しかし、その日はせいぜい小児科に行く程度と決めきっていた茜は「はあ。」ただけ思ってバタンと暗闇へ閉じこもると、小さな2人の間に挟まって寝転んだ。

狭くてゆっくりできるような空間でもないけれど、溜め込んでいた重たいものは少なくともそこにはなかった。

Lane2 高橋千尋

Lane2 高橋千尋

「ちょっと対応悪すぎるんじゃない？時間もかかりすぎでしょ、急いでるんだけど。」
そう言われば、謝りつつもう少し待ってもらえるようにと促すだけ。この役所ではみんなそうやって対応する。それでも今度の住民は「それにしても時間かかるしさ、さすがに優先してもらわないと。」なんて言ってきたもので、休憩明けの千尋が顔を出すとみんなが道を開けた。
「お時間はいただいているが進行している状況ですので、かけてお待ちいただけますか。確認取れましたらすぐにお声掛けしますので。」
住民たちもみんな、千尋を見上げるような形になることが多い。別に特別なことを言うわけでもないのだが、不思議なもので、住民も「そうなのか」とただ思うことができるようだった。

だから、ちょっと「厄介だな」って思ったことがあればみんな千尋を頼ったし、そんな程度のことでの役にたつならと千尋も自ら厄介者の前に現れるようにしていた。
「感情が表に出ないタイプ」とは昔から言われ続ければ、千尋も自分をそんなふうに思ったし、コミュニケーションが必要なことも苦手なのかもしれないと思っていた。でも、この仕事をし始めてから、意外と人と関わることが向いているのかもしれないと思ったし、そう思うことを、やらざるを得なかつたこの仕事を続ける理由に掲げることができた。

それと、この休憩中だって10数年思い続けてきたことをひっくり返されてしまうような事実を知ってしまっていて、でも、それを胸の内にとどめているだなんて、誰も思ってなかつた。

「お父さん。今日も人の役に立ちました。」そのまま表情ひとつ変えずに帰宅し、いつもの通り父親へと報告をする。父は千尋と違って、コロコロと表情が変わるようにタイプであったが、もう遺影ともなってしまえばずっと微笑んだままである。
数分でテキパキと家の中の整理をすると夕飯の支度を始め、途中で切り上げるともう一度家を出てそのままじっと待つ。やがてバスが近くに止まると、そこへ千尋も近づいていき、中から出てきたスタッフに軽く会釈をしてから車椅子を引き取つた。車椅子に乗つた母は千尋に楽しそうに話しかけ続けた。

家に入っても、毎日同じ会話をする。「ちーちゃん、今日ももう宿題終わらせたのね？お兄ちゃんが帰ってくるまで一緒にごはん作ろうか？」千尋が1人で夕飯の支度をしてもいいのだけど、このために少しだけごはんの準備を残しておいて、残りは母を手伝うようにしていた。千尋は、この時間が一番好きだった。

毎日、静かに一日が過ぎていく。大きな段差があるわけでもないし、自ら角を曲がってみることもせず、ずっと緩やかな下り坂だ。終わりがどこにあるのかは知ることができない。

母は寝る時間も早く、夜はとても長い。毎週楽しみにしているお笑いの番組を見ようとテレビを付けると、今日は陸上の国際大会があったようで、ちょうどそのニュースが流れていた。
千尋は高校時代は走り高跳びの選手だったが、走るのも速かったので大会ではいつもリレーにも出ていた。せっかくだからと短距離に登録されたこともあった。だから、陸上競技はたくさん関わったとは自分でも思っていたのだけど、たった今テレビに映し出される陸上大会は自分のいた世界とも思えず、すぐにチャンネルを回した。
だって、今は出かけるときも車椅子を押すから絶対に走らないし、跳ぶなんてことも誰にとっても非日常ではないか。

スマホを手に取ると、メッセージアプリを開いた。賑やかなテレビの音の中で「本当にそれは終わりなのかな？」とつぶやきながら、スマホに書かれた事実と父のいる仏壇、そして、母の寝床を順

に見回した。母にはもちろんずっと生きていてほしいのだけど、きっとこの下り坂にも終わりがある。

でも、下り坂の終わりは、千尋にとってはもしかしたら始まりなのかもしれない。

Lane3 吉田美穂

Lane3 吉田美穂

待ち合わせをしても、間に合ったことがなかった。

みんなそれが美穂の性格上のことだと思ってたし、気の向くままに生きて走ってくような美穂を「仕方ないやつだな」と憎めないやつ扱いした。風のような彼女の考え方をどこか羨ましくも思った。

でも、美穂自身は決してそうなりたかったんじゃない。

高校時代だって「夜ふかしするから寝坊して遅刻するんだろう」と何度も怒られた。怒られたかったんじゃない。

当時も、大人になった今も、朝はすごく得意だし、早起きするととても気持ちがいい。

遅刻したからって寝坊と決めつける世の中が馬鹿らしく思えた。

「美穂おはよう！ 行ってくるね！」

遠くのあぜ道から夫の大輔が叫ぶ声が聞こえてきて、美穂はやっと時間の経過に気付いた。この地にあるこの生活上にはもう遅刻という概念なんか無くて、大輔の表情が見えなくてもニッコリとしながら手を振っているのがわかつっていた。

作業を切り上げてから走って家に戻ると、食卓にまだホカホカとした朝食が並んでいた。きっと、大輔が出かける直前にお皿に盛り付けたんだろうと想像して、心の中まで暖かくなるようだった。

お味噌汁をすすりながら、今日はあれをしよう、これをしよう、と考えて、それだけでもう素敵な一日を満喫したようにもなれる朝が大好きだった。

「まずはトマトの定植だ！」と空になった朝食の食器を放って外へとまた走り出す。しかしどんぼ返りで家のドアがまた開くと、美穂はそのまま走って2階へ駆け上がっていってしまった。2階には彼女の書斎がある。結局そのままお昼を過ぎ、書斎のドアは夕方に大輔がノックするまで閉じたままだった。

トントントンと扉が音を立て、美穂ははっと振り向く。

「頼まれた原稿送って…後はまた違うことにのめり込んで。随分集中できたけど、もう夜だね？」

そう言って、昼食すら取っていないことに気付くが、それでももっと時間が欲しかった。

「夕食は何がいい？できるまで続きの仕事してなよ。」大輔も特に自分の生活に支障がなくて、この頃はまだ美穂の生活サイクルを面白がるくらいだった。それに彼女の仕事も順調だから、あまり邪魔しちゃいけないとも思っていた。

スマホを見ると、久しぶりに高校時代の友人たちがグループメッセージでやり取りしているようで、通知が入っていた。また後で見るか、と1階のダイニングキッチンに降りると、大輔がソファに横になっていた。「ごめん、ちょっと頭痛で。少し休んだら支度するから。」

美穂は少なくともこの家に住んでから初めてキッチンに立った。大輔がコツコツと溜めていた作り置きのおかずのおかげで晩御飯は用意出来たのだが、大輔はそのまま頭痛がおさまらずに寝室に行った。

美穂は1人で食事を終えると先程見なかったグループメッセージを読み始めた。しかし、あまりの衝撃にスマホを投げてそのままソファで寝てしまったのだった。

今もキッチンのシンクは、朝使った食器と、夜使った食器とであふれていた。

奥付

「私は、走り続けるのか(解説用)」

著者:かめい かな

2026年1月13日 初版発行

2026年1月20日 改訂版発行

© kameiworks.com